The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	緊縛研究と哲学者 ： 京大・緊縛シンポジウムとは何だったのか
Author(s)	河原, 梓水
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2022, 4, p. 69-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86364
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集３　「〈応用〉することの倫理――緊縛シンポ、ブルーフィルム、ジェンダー」

緊縛研究と哲学者――京大・緊縛シンポジウムとは何だったのか

河原　梓水

はじめに

2020 年 10 月 24 日、京都大学人社未来型ユニット主催で行われたシンポジウム「緊縛ニューウェーブ×アジア人文学」（以下、緊縛シンポ）は、緊縛というテーマ設定、そして緊縛パフォーマンスの実演が行われたことによってかなりの評判を呼んだ。YouTube にて英語の字幕付きで公開されたシンポの動画は 59 万回再生され、国内だけでなく、国外メディアもこれを報道した。シンポ終了直後の聴衆の反応はおおむね好評だったように見受けられた。しかしその後、1 件のクレームを受け、シンポ動画は削除され、「シンポジウムの動画の一部について不愉快と感じられた方は申し訳ございません」という謝罪文がシンポの公式サイト[1]に記載された。この文言は、緊縛パフォーマンスへの批判に対応したものという印象を見た者に抱かせ、本件は一転、「学問の自由」や「緊縛は女性蔑視か」といった論点に発展、「炎上」することとなった。

筆者はオンラインプラットフォーム note というサービスを使って、既に緊縛シンポの内容と、その事後対応の問題点について詳細な見解を公開している[2]（以下、note+記事番号にて略記）。本ワークショップの後に、新たに「京大・緊縛シンポ　主催者からの応答」という記事を公開した（以下 note⑦）[3]。筆者の最も主張したいことは、計 7 つの note 記事で既に言い尽くしており、さらには『フィルカル』誌上にて、この件について小西真理子氏と対談もさせていただいた（河原・小西 2021）。京都新聞の取材にも応じている[4]。にもかかわらず、この度またしても稿を成すのは、筆者の予想以上に、緊縛という、いくぶん変わった研究対象自体が、研究者を含めた人々の目を曇らせ、問題を見えなくしている実感を得たからである。

---

[1] 緊縛シンポ公式サイト，人社未来形発信ユニット，https://ukihss.cpier.kyoto-u.ac.jp/2262/（2021 年 9 月 19 日参照）

[2] 河原梓水「京大・緊縛シンポの研究不正と学術的問題点を告発します」①～⑥, 2021 年 1 月 9 日・10 日・11 日公開、https://note.com/azumi_xx/m/mb2dd7ff4eb0a（2021 年 11 月 30 日参照）。

[3] 河原梓水「京大・緊縛シンポ　主催者からの応答」、2021 年 10 月 23 日公開、https://note.com/azumi_xx/n/n6bf752c0af41（2021 年 11 月 30 日参照）。

[4] 「緊縛シンポ・研究者見解」（『京都新聞』、2020 年 12 月 22 日朝刊 14 面）および、本記事を再編集した「京大で緊縛シンポ、ネット配信後の「謝罪」に議論 問われた学問の在り方とは」（京都新聞デジタル、2021 年 1 月 8 日公開、https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/458806）、（2021 年 11 月 1 日参照）。

本件で起きたことは、学部学生がうっかりと犯してしまうような、初歩的ミスの膨大な累積である。その原因は、研究対象たる緊縛自体に対する無関心であり、その結果出来上がってしまったのが、社会学や文化人類学では入門的授業で注意喚起がなされるであろう、典型的な、人道に反する搾取的研究である。緊縛というテーマでなければ、あるいは京都大学教授が主催者でなければ、誰かがシンポ開催前にその問題点に気づきそうなものであり、シンポの中止が議論された可能性は十分にある。少なくともシンポ当日、参加した研究者から厳しい批判が次々と飛び出したはずである[5]。そうならなかったのは、どうも、緊縛というテーマ自体に原因があるようだ。

緊縛や緊縛マニアを必要以上に、なにか恐ろしい、近づくことが非常に困難な存在とみなし、緊縛研究をとりわけチャレンジングな試みと位置付けるのは、緊縛を腫物扱いすることであり、いかがなものかと思う。実際は先行研究があるのだが、もし仮に緊縛がこれまでに一度も研究されたことがないものであったとしても、これまで蓄積されてきた研究手法と全く違うアプローチが必ずしも必要になるわけではない。特に緊縛シンポで行われたように、実際の緊縛マニアに接触し、彼らの語りや、彼らから得た情報を研究対象とする場合には、文化人類学や、社会学における質的研究の蓄積が大いに役立つことは論を待たない。緊縛は確かに「いかがわしい」サブカルチャーかもしれず、緊縛マニアは確かにマイノリティではあるが、マイノリティや性的な事象を対象にする研究は年々増加しており、この点で緊縛は、取り立てて特異な研究対象というわけではないはずだ。緊縛マニアたちは、ある一面では特異な点があるかもしれないが、当然ながら、普通の社会生活を送る一般人としての側面も持ちあわせている。怪物や猛獣では決してないのだから、過度に特別視する必要は何もない。粛々と既存の研究方法に基づいて向き合うことが可能である。

現在存在する様々なマイノリティ研究、文化研究を見るまなざしと同じように、冷静に、緊縛シンポとは何だったのかということを判断してほしいと願う。もちろん、京都大学の教授が主催しているからといって、過大評価することもあってはいけない。本来の専門分野でどれほど素晴らしい業績があったとしても、新たに開始された緊縛研究の質がただちに保証されるわけではない。以上の問題意識に基づき、本稿では、緊縛シンポにおける哲学者の報告を取り上げ、彼らがいかに現実の緊縛を見つめず、自らに都合のよい対象として緊縛を再定義し、彼らの頭の中にのみ存在する架空の緊縛について論じていたかということを明らかにする。

筆者は歴史研究者であり、哲学・倫理学についてはなんら専門的知識を持たず、したがって、本ワークショップが前提とする応用哲学をめぐる諸問題について理解しているとはいいがたい。しかし、緊縛シンポで見られた哲学者の研究姿勢に深刻な人道的問題がある

[5] シンポの報道や SNS 上の意見を見る限り、緊縛研究は学際的研究だとみなされている。しかし、本シンポと、出口康夫氏が率いていたという緊縛の研究会が真に学際的研究の場であり、社会学者や文化人類学者が一人でも加わっていたならば、たちどころに問題が可視化されていたはずである。

ことは、分野の相違を考慮しても明白だと考えている。この点が、緊縛への社会の色眼鏡によってなかなか理解されないとすれば、サドマゾヒズムを研究し、現代の SM コミュニティにも比較的長期にわたり関わってきた筆者が、いま一度説明を尽くすことは必要だと考えた。これが本稿を成す理由である。

なお、本稿では、緊縛シンポのテーマに即し、緊縛の話を基本的に緊縛の実践を指して用いることとする。一般に緊縛の実践には、拘束そのものが目的である場合（＝Bondage）、拘束による苦痛が目的である場合（=Sadism/Masochism）、拘束による支配が目的である場合（＝Domination/Submission）などがあり、これらは既存の SM/BDSM 研究においてはっきりと区別されている[6]。これに加えて、観客を想定したパフォーマンスとしての緊縛にはまた異なる要素があり、同一視することはできない。しかし、緊縛シンポにおいてこれらは区別されていなかったため、用語や認識に矛盾が発生している箇所が複数ある。当日用いられた概念についても、誤用や、問題を感じるものが多くあるがそのまま用いている。あらかじめご了承いただきたい。

１　緊縛シンポにおける偽史の役割

１－１　なぜ偽史は語られたのか

まず、シンポの第一報告である F 氏・Y 氏「緊縛入門ミニ講義　緊縛から KINBAKU へ」（以下「ミニ講義」）で行われた偽史の再生産と流布について検討したい。

前提として、緊縛を学術的に研究する際に、緊縛の歴史を踏まえることは必ずしも必要ではない。現代に展開する様々な事象について、その歴史的背景を踏まえず分析する研究はいくらでもある。緊縛もまた、歴史的な前提を踏まえることなく「ニューウェーブ」を論じてもいっこうに差し支えないのである。むしろ彼らが『緊縛の文化史』よりも参照すべきだったのは、緊縛の近年の海外展開について論じている田中雅一氏、坂井はまな氏の研究であった（田中 2015, 坂井 2009）[7]。

緊縛実践の歴史はいまだ明らかにされているとはいいがたいため、踏まえたくとも踏まえることができない[8]。このような状況で、シンポにおいてわざわざ緊縛の歴史を語る報告

---

[6] SM/BDSM 研究における概念の使い分けについては、note⑤、および（拙稿 2021）において詳述した。

[7] 坂井論文には、緊縛に特化はしていないものの、1980 年代以降を中心に、日本と欧米の SM/BDSM 文化の流れが概観されている。シンポでは、これを参考に緊縛の海外展開の流れを提示する方がおそらく有益であった。

[8] 緊縛実践の歴史はほとんど研究がないが、緊縛写真の歴史であれば、濡木痴夢男・不二秋夫を監修者とし、秋田昌美によって著された『日本緊縛写真史①』（自由国民社、1997）は良書であり、緊縛写真の歴史を実証的に、丹念に追っている。本書はタイトルに「緊縛」が含まれているため、検索で容易にたどり着くことのできる文献であるが、シンポ登壇者は本書を読んでいないか、読んだとしても内容を理解するに至っていないと判断できる。なぜなら第一に、本書では、緊縛写真と緊縛実践を区別し、前者の歴史のみにフォーカスしている。両者は全く異なるので、この区別は非常に重要である。「ミニ講義」発表者が本書を精読していれば、浮世絵に描かれた緊縛と緊縛実践そのもの、そして戦後雑誌に掲載された緊縛写

が設定されたことについて、主催者側の意図を検討することは無意味ではないはずである。以下、「ミニ講義」およびシンポ全体において、偽史を語るという行為がいかなる目的で行われ、どのような役割を果たしたのかを検証したい。

note②で指摘したことだが、「ミニ講義」では、アメリカ在住の緊縛師の著書の翻訳である、マスターK 氏著『緊縛の文化史』に全面的に依拠し、適宜引用しながら緊縛の歴史が語られたが、本書は参考文献として示されていなかった[9]。さらに、Y 氏・F 氏は、本書の内容を自身で検証することをせず、推定や伝聞調の言い回しをとらず、ほとんどを断定調で説明した。この「ミニ講義」は、趣旨説明において出口氏から「議論のバックグラウンドとなる内容」であり、「非常に上手にできております」と紹介された（note②）。かかる認識を主催者が示している以上、ここで語られた偽史は、報告者の責のみに留まるものではない。Y 氏と出口氏には、かつての指導教員と教え子という権力関係がある以上、報告内容が真に Y 氏・F 氏の創意のみによるものであったかは確定できないし、なによりシンポ主催者として、出口氏にはこの偽史の流布についての重い責任があるはずである。

さて、『緊縛の文化史』は学術的な研究書ではないため、その内容を吟味する際には、研究書に対するよりもさらに慎重な姿勢が求められる。Y 氏は、本ワークショップ討論において、「緊縛コミュニティ内では教科書のように扱われていると聞いていた」ため、その内容を無条件に信じてしまったと述べた。

しかし、緊縛コミュニティ内で教科書のように利用されていることが仮に事実だとしても、その事実自体は、教科書とされる本の内容が学術的に十分な蓋然性があることを全く保

真を連続的にとらえるという致命的な誤認識には至らなかったはずである（ただし、そもそも実践とイメージを区別することは多くの学問において常識である）。第二に本書では、1950 年代、既に欧米に日本の緊縛写真が渡っており、何らかの通交があったという興味深い事実を指摘している。この点は緊縛の海外展開を重視するシンポにとって極めて重要な情報だったはずであるであるが、シンポでは言及されなかった。

本書は、京都大学図書館には所蔵されていないが、京都大学図書館蔵書検索システムの他大学検索を利用すれば表示されるものである。このような容易に発見できる文献にすら目を通していないという事実は、シンポ登壇者たちが、緊縛に対する既存の知見を全く収集しようとしていないということを意味するだろう。このことは、シンポ開催の母体となったという緊縛の研究会の実態を疑わせるものである。

[9]『緊縛の文化史』が出典として示されていなかったことから、筆者は note②において、これを剽窃という研究不正として批判している。しかし、発表者は哲学者であり、哲学分野における参考文献表示の慣習について、筆者は習熟しているとは言えない。筆者の専門である日本史学は、おそらくこの点についてかなり厳格であり、知人の研究者に確認したところ、全員がこれを剽窃と判断した。しかし、哲学ではこの程度は許される、という可能性はあり得るだろう。そこで客観性を保つため、筆者が剽窃と判断した要素について補足しておく。「ミニ講義」においては、参考文献の表示が一切省略されていたわけではなく、報告内で引用された写真や浮世絵、事例にはほぼすべてに出典が示されていた。画像や写真の出典元として適切とは言えない、Twitter やウィキペディア、個人ブログからの引用もあったが、水越ひろ『写真で覚える捕縄術』からの写真引用は、きちんとページ数まで明記されていた。このような発表資料において、『緊縛の文化史』だけが明記されていなかったため、筆者はこれを剽窃と判断するに至った。ただ、このような操作が報告者本人によるものなのか、主催者である出口氏からの指示によるものなのかは不明である。

証しない[10]。緊縛コミュニティに限らず、特定の集団内で流布している言説は、その構築性自体が研究対象となるものである。「緊縛コミュニティ内では教科書のように扱われている」から「正史」として採用するという論理は成立しない。

このようなずさんな先行文献の参照が行われた原因は、主催者側の研究能力の不足に起因するのかもしれないが、学生の書く卒業論文においてすら、このような迂闊さが許されるとは思われない。すべてにおいてこのような姿勢では、博士号が取得できるはずがない。したがって、単に研究能力の不足というよりも、緊縛という文化に対する何らかの「侮り」があったからではないかと推測される。意図的だったとは思わないが、「緊縛文化の歴史など、この程度のレベルでもよい」、という無意識の発想があったのではないか。次節で論ずる『緊縛の文化史』に対する歪曲/誤読は、もしかするとこの点の傍証になるかもしれない。

１－２　歴史観の歪曲と緊縛の再定義

「ミニ講義」は、マスターK 氏著『緊縛の文化史』を全面参照しつつも、本書の内容をそのまま語ったわけではない。むしろシンポの趣旨に合致する部分だけをつまみ食いし、曲解し、結果的にマスターK 氏の主張とは真逆のストーリーに作り変えていた。「ミニ講義」で提示された緊縛に関する歴史観は、すなわち、緊縛は、捕縄術という武士の武芸に起源をもつが、江戸時代以降、浮世絵や歌舞伎などに取り入れられ「文化化」する、しかし第二次大戦後、「SM ブーム」が起きて緊縛が「SM の一部」となったが、それが現在、再び SM の文脈を離れて、海外でアートとして評価されている、というものである。

この歴史観には、緊縛は、本来 SM とは関係なく、歌舞伎・浮世絵などの、（現代においてはハイカルチャーとみなされがちな）「文化」と関連するものだった、それが戦後に SM 雑誌と SM ブームを経由することによって、（アンダーグラウンドでサブカルチャーに過ぎない）SM の一部とみられるようになって「しまった」という意識が垣間見られる。この歴史観が事実無根であることは、note③において示した。緊縛は最初から「SM」文化の中心にあり、戦後日本においてサディズムと密接に関連していた。緊縛を暴力や犯罪から遠ざけ、洗練させ、文化として確立したのは SM マニアたちである（拙稿 2015）。

「ミニ講義」で示された事実無根の歴史観は、参照元であるマスターK 著『緊縛の文化史』に書かれておらず、報告者が予断に基づくストーリーをあらかじめ持っており、それに従って『緊縛の文化史』の内容を歪曲、もしくは甚だしく誤読したと言い得る。この点について、緊縛シンポにおいて重要なキイワードであった「アート」という言葉のずれに着目して検討する。

---

[10] 筆者の経験に照らせば、『緊縛の文化史』を教科書と位置付けている緊縛マニアには会ったことがない。緊縛の伝統化は当事者にとってもメリットのあることであるため、そのようなマニアが存在すること自体は事実として想定できるが、そもそも、緊縛の歴史について、好奇心以上の強い関心を抱いている緊縛マニア自体がそれほど多くはない。多くのマニアは、緊縛の歴史を知らず、知らずともそれを十分に楽しんでいる。

シンポでは、近年、緊縛は「海外では純粋にアートとして評価されている」と主張し、単なるエロではない、単なる SM ではない緊縛こそを、アートという言葉で示していた。当日は高級ブランドバッグのデザインに採用された縛りなど、明らかにアートとはいいがたい事例もこの新展開の一例とされていた。このような事例が包摂される理由としては、脱 SM、脱エロスが、新しさの要素として重視されているからだと考えられる。このように、シンポで主張された「純粋にアートとして」の「純粋」の意味は、そこに SM 的要素やエロス的要素が含まれていないという意味だと判断できる。シンポにおいては、SM・エロスは「不純物」であり、アートとは対立的に位置づけられていた。この対立は序列化を含んでおり、アートとしての緊縛を上位に、そうでない SM 的・エロス的な緊縛を下位に位置づけるものでもあった。ところが、『緊縛の文化史』の姿勢はそうではない。

本書では、「アート」は「芸術」と「技芸」双方の意味で用いられている。マスターK 氏は、「緊縛とは、日本で芸術（アート）の域にまで高められたもの」であると述べ、ほかならぬ日本で、緊縛がアートの域に到達したという見解を示している。そして、彼はこのアートの担い手として「高度な技を持った実践者たち」を、技芸（アート）の担い手として挙げている。具体的には、濡木痴夢男、明智伝鬼などの、SM 文化の中枢にいた緊縛師たちである。つまりマスターK 氏は、SM やエロスの文脈を離れた緊縛がアートなのではなく、SM としてのエロティックな緊縛の技術・芸術性こそをアートと呼んで称賛しているのである。このように、「ミニ講義」およびシンポでアートとされたものと、『緊縛の文化史』でアートとされているものには、深刻な相違がある[11]。

シンポにおける「アート」の定義および示された歴史観のもとでは、マスターK 氏がアーティストとして称賛した緊縛師たちは、緊縛を SM 化し芸術から遠いものにした「戦犯」になってしまう可能性がある。また、マスターK 氏が「先人の努力の軌跡」として熱意をもって記述した戦後の緊縛文化の展開の意味も、「差別との闘い」から、緊縛を「SM 化」した悪しき流れに変わってしまう。他ならぬマスターK 氏の著作を根拠に、マスターK 氏の主張と正反対の歴史観の創造を行なうこの行為は暴力的である。マスターK 氏への真摯な謝罪が必要であろう。それにしても、なぜこのような歪曲が発生し、偽史が語られてしまったのだろうか。

捕縄術や歌舞伎・浮世絵と緊縛が結びつけられ、「日本文化」に接続される事態を、仮に緊縛の伝統化と呼んでおく。この伝統化はさまざまな場所で行われており、緊縛マニア自身が積極的に行うこともまれではない。しかし「ミニ講義」では、伝統化は緊縛すべてになされたのではなく、「SM 化」したとされた緊縛を除外した上でなされた。これは特異な伝統化であり、研究する価値のある緊縛とそうでない緊縛をより分ける機能を果たす。「ミニ講義」で用いられた「純粋なアートとして評価」という文言を踏まえれば、伝統化によって発せられるメッセージは、緊縛は、本来は歌舞伎や武士の武芸と結びついており、決していか

[11] にもかかわらず、「ミニ講義」では、『緊縛の文化史』からそのまま「アート」という言葉を用いている箇所もあった。

がわしいものではなかったのだ、というものだ。つまり「ミニ講義」は、緊縛自体について知るためではなく、歴史を権威付けとして利用し、伝統化することで、緊縛を、研究者に都合の良い、研究するに値する、伝統的な文化として再定義することを目的に設定されたと考えられるのである[12]。なぜこのような操作が必要だったのかといえば、それは彼らが、緊縛をそのままでは研究対象とするにふさわしくないものだと考えていたからということになるだろう。彼らは、緊縛を研究するといいながらも実は、緊縛の価値を心から信じてはいないのである。

もちろん、研究対象を適切に限定することは妥当であり、必要なことである。筆者は、アートとしての緊縛のみに着目すること自体が問題であり序列化だと言いたいわけではない。現代アートとしての緊縛、すなわち近年 K 氏が発信している種の緊縛は、緊縛という言葉が示す範囲のごくごく一部であり、初発の研究対象とするに適切な大きさであったと思う。つまり、シンポの主題を「現代アートとしての緊縛」に限定すること自体は全く問題がない。しかしそれは、偽史を用いて緊縛を序列化し、「現代アートとしての緊縛」を優位に置くような操作をして行なう必要はない。単に、緊縛といっても様々なものがある、本シンポではここに着眼する、と述べればよかっただけである。

いち歴史学者として、歴史がこのように特定の事象や集団を一方的に再定義し、学問の権威付けに利用されたことを誠に遺憾に思う。

２　空疎な「自由」論――出口康雄氏報告「緊縛の哲学」について

２－１　防御言説としての「自由」

次に、出口康夫氏の報告、「緊縛の哲学 : アジア的自己の観点から」（以下「緊縛の哲学」）について検討する。

「緊縛の哲学」は、「なぜ、人は縛られると自由を感じるのか？」という問いをパラドクスとして立て、出口氏の自説である「アジア的自己/われわれとしての自己」を用いてこれを解いていくというものだった。note⑤では、出口氏は近年、「アジア的自己/われわれとしての自己」という概念を用いて多くの講演や論文執筆を行っており、緊縛シンポの報告もまた、自説を緊縛にあてはめたに過ぎないことを指摘した。そして出口氏が、緊縛から「支配」と「従属」概念を抹消し、ノーマライズすることで緊縛を肯定可能なものとして論じたことは、逆説的に緊縛を否定し、スティグマ化することであることを指摘した。これらは前章で論じた歴史を用いた緊縛の序列化と並んで、甚大な当事者加害である。この点に関してもnote⑤で詳述したため、ご参照いただければ幸いである。

note⑤では主に分析内容に対する批判を行なったわけだが、本稿では、出口氏が立てた「なぜ、人は縛られると自由を感じるのか？」という問いの学術的無意味さについて述べた

[12] 発表者がこの点に意識的だったかどうかはここでは問わない。あえてしようと思って差別をする者はわずかであるからである。

い。結論から言えば、「縛られると自由を感じる」という言葉は、緊縛マニアたちが対外的につくりあげた防御言説の典型であり、そのまま受け取って分析することが難しいものである。

ある程度の年月、SM や緊縛に携わっている人々は、たいていの場合、耳触りのよい SM/緊縛論をひとつやふたつは持っているものである。例えば SM バーはいわば「観光地」として、接待等に用いられることも多く、SM に興味がない客も多く訪れる。仮に興味があったとしても、プロから見れば勘違いと感じられるイメージを抱いていることも多い。こういった、彼らが「一般の人」、あるいは「ノーマル」、「ノンケ」、「健常者」などと呼ぶところの相手に対して語られるのが、防御言説としての作り込まれた SM/緊縛論である[13]。いわく、苦痛に見えても実は苦痛はそれほどでもないこと、S はサービスの S であり、実は M に奉仕する存在であること、S と M は表裏一体であること、SM/緊縛は双方のコミュニケーションであること、愛であること、精神の解放であること、下半身ではなく脳で感じるセックスであること、あるいはセックスではないこと、肉体的ではなく精神的なものであること…等々。こういった言説は、相手に適度な驚きや刺激を与え、自分の知らないなにがしかの真理がこの世界にあるということを感じさせる。

SM/緊縛マニアたちは決して悪意を持って嘘をついたり、相手をだまそうとしたりしているわけではない。ただ少し、相手に合わせて楽に話そうとしているだけである。相手の価値観や偏見の度合いは、二言三言言葉を交わせばたちどころにわかる。理解してくれそうもない相手に真剣に向き合うことは徒労であり、自らを傷つける。だから彼らは、緊縛や SM についての、彼らが実感するところの本質について、相手の価値観や偏見の度合いに合わせて巧みに誇張し、ずらし、目をくらませようとする。そうとも言えるが、そうではない、といった絶妙な言説が構築される。これは、何も緊縛や SM に限った話ではなく、マイノリティを中心とした多くの人びとが取る戦略のひとつである。フィールドに出て研究を行なう者にとってはよく知られた事実であろう。

この作り込まれた SM/緊縛論はたいてい良くできているため、多くの人々に感銘を与える。そのため、SM や緊縛に触れはじめて間もない者や、この SM/緊縛論に齟齬するような SM マニアと接点をあまりもたないソフトな SM を嗜好する者を虜にしていることがよくあり、そのためこれを真剣に語る者もまたコミュニティに混在している。そのこと自体はもちろん何ら問題がない。しかし、真剣に語っているからといって、その内実が具体的であるかどうかは別の問題である。防御言説であるからには、それは言葉からは決して彼らにたどり着けない迷路のようなものになっている。

出口氏が着目した「縛られると自由を感じる」という言葉は、決して完全な嘘というわけではない。確かにそのように感じる人々は存在するのだろうし、直接的・間接的かはともかくとして、出口氏は確かにその証言を聞いたのだろう。しかし、「緊縛されると自由を感じ

[13] この点については、（宮本・安渓 2009:19-20）もあわせてご参照いただきたい。繰り返し尋ねられることによって構築されるタイプの言説も当然存在する。

る」という証言は、筆者からすれば典型的な防御言説である。誰が、どのような場で、具体的に何を言おうとしていたのかという文脈を検討せずしては、分析したり理解したりすることは不可能な言説である。以下、どのように防御言説が語られるのか、筆者の経験的理解に基づいて述べる。ただし、これはあくまで一例にすぎず、すべての防御言説がこのようなプロセスを経て発せられるという意味ではない。

一般的には、緊縛とは苦痛を伴うものとみなされ、それを求めることはおかしな行為であるとみなされがちである。実際は見た目から想像されるほどの苦痛はないことも多いのだが、そして縄が複雑に全身に絡みつき「残酷」に見えるような縛りのほうが実は苦痛は少なく、シンプルな縛りのほうが身体に強い負荷がかかることが多いのだが、そういったことも知られていない。性的快楽とも密接に結びついてイメージされることも多く、緊縛されるのが好きだと告白すれば、それは性的にマゾヒストであるという告白と同義に受け取られることもしばしばである。さらには、乱暴に扱ってもよい存在だと誤解され、トラブルが発生することも決してまれではない。

note⑤でも述べたが、緊縛や SM を愛好する人びとの中には、支配や苦痛そのものを大切にし、求めている人々がいる。しかし、これはなかなか理解されにくいものである。一般社会において、「支配」や「苦痛」という言葉は、これらが否定され取り除かれるべきものだという強い規範と結びつき、否定的な意味を帯びずにはいられないからである。そのため、肯定的に、取り除かれるべきではないものとして、これらを語る言葉を持たないマニアは多い。持っていたとしても、理解してくれそうもない人にそれを語る者は少ない。こういった場合に、意識的、無意識的に選択されるのが、ポジティヴではあるが中身の曖昧な言葉であり、その際には「自由」や「解放」、「癒し」といったものがしばしば選ばれる。私は縛られて嫌な気持ちになっているわけではない、というごくごく基本的な前提すらも共有していない相手が多い中、緊縛/苦痛/支配は肯定できる、本人にとってかけがえのない行為なのである、ということを表現するために、抽象的な「自由」や「解放」といった言葉は便利なのだ[14]。

もう一つ例を出したい。SM コミュニティにおいて、「変態」という言葉は通常は全く否定的な意味を持たず、単なる自称、もしくは誉め言葉として機能することが多い。このような褒め言葉としての「変態」の中身を、通常の、「性的異常者」や性犯罪者を指す、非常にネガティヴな「変態」の用法しか知らない人々に伝えることは難しい。「あの人って本当に変態だね」というコミュニティ内の褒め言葉を、無理やりに「一般人」にもわかる言葉で置き換えれば、「あの人は本当に個性的でおもしろい」といった形になるだろう。しかし、「個性的」、「おもしろい」といった言葉に置き換えた時、もとの「変態」という言葉が持っていた文脈は途切れ、全く違うものになってしまうことは明らかである。そして、この変形後の「個性的」という言葉から、もとの「変態」という言葉に込められたものを復元することは

[14] この解釈はあくまで、SM/緊縛に関するさまざまな「自由」の用法の一パターンであり、当然実際にはさらに多種多様な意味・目的で「自由」は用いられている。

ほぼ不可能であり、方法としても適切ではない。出口氏が「緊縛の哲学」で行ったことは、このようなことに近いだろう。

出口氏が、緊縛実践者の誰かから、「緊縛されると自由を感じる」といった類の証言をきいたとする。この「自由」という言葉の中身については、上記のように、注意深く取り扱う必要があった。しかし出口氏は、この「自由」を、たやすくエーリッヒ・フロムの著書『自由からの逃走』で論じられる「自由」と連結させた。しかし言葉が一致しているだけでは、単なる言葉遊びであろう。緊縛マニアが「自由」という言葉を用いて伝えたかったことは、子細に検討すれば、「自由」とは全く無関係である可能性は十分にあるのである。もしかすると「解放」や「逃走」に置き換えても成立したかもしれないのだ。出口氏が自ら全身を緊縛され、そこで「自由」を感じた、という経験に立脚して語るならともかく、この「自由」には緊縛そのものとの連関が全くない。

「自由」は、あいまいだがポジティヴなイメージで「ノーマル」を迷路に誘導し、決して「本質」にたどり着かせないようにするための単なる誘蛾灯だ。全く当たり前のことではあるが、SM や緊縛の実践に、実践者たちが真に大切だと感じる「自由」や「解放」や「逃走」は、防御言説の迷路を抜けたはるか先の地点にあるのである。

２－２　「自由」が覆い隠すもの

防御言説は、より戦略的に構築されている場合も頻繁にある。こうしたものは、緊縛の暴力性をやわらげ、男性緊縛師と女性モデルの権力関係を不可視化する役割を果たすことがある。そういった局面において「自由」や「解放」といった言葉が用いられてきた事実があるため、注意が必要である。しかし、当日の報告においても、その後の炎上対応においても、出口氏は全くこの点に注意を払っていない。

緊縛の伝統化は、緊縛マニアが自ら行うこともあると先に述べた。（拙稿 2021）において指摘したが、とりわけ欧米において、SM の実践は長らく精神疾患や犯罪と結びつけられて社会から強く批判されてきた。日本は欧米に比して早期に脱病理化がすすんだが、それでも、シンポにおける緊縛パフォーマンスが女性蔑視という批判に容易に結びついたように、緊縛が暴力だと判断される可能性は常にある。このような状況を打開するために、実践者側からの防御として、緊縛の伝統化や、「自由」や「解放」、そして実際に場を支配しているのはマゾヒストや縛られる側の方である、といった説明が行われることがある[15]。

欧米の BDSM シーンにおける<日本>イメージを検討した坂井はまな氏は、欧米 BDSM シーンにおいては、日本社会における男女間でのパワーバランスの偏りを不問に処してしまう不思議なものとして、日本の「伝統」や「美」という観念が用いられていると指摘する

[15] このほか、プロの緊縛師が海外に向けたブランディングとして、緊縛の伝統的イメージを積極的に利用したり、オリエンタリズムに基づく誤解をそのままにしたりすることもよくある。

（坂井 2009）。シンポ当日のパフォーマンスでもそうであったが、日本の緊縛パフォーマンスにおいて、縛られる側の女性は、ほとんどリアクションをせず、緊縛師との間に会話や合図も交わされないことがよくある。つまり、男性緊縛師の「言いなり」に見え、主体的な意志を持っているかが表面的にははっきりとわからない。この点が欧米においてどのように批判されず受容されているかについて、坂井氏が述べた部分を引用する。

> 恥じらいを見せながら、黙ってひっそりと耐える M 女性の姿。彼（女）たちが繰り返し語る、日本の緊縛の神秘性。曰く、日本の緊縛は拘束自体が目的なのではなく、身体を縛ることによって逆に相手の精神を解放し、そこから本来の美を引き出すものである。（中略）それは言葉に頼らずとも自然に相手に身を任せられるまでの信頼関係に結びついたものであり、だからこそ自然で美しいものなのである、と。
>
> 　このように彼（女）らは精神性＝自然性を強調する。そうした心身一元論的東洋思想のイメージに加え、明智[16]によってもたらされた「伝統」のイメージ。これらが一体となったものが、海外 BDSM 界における<日本>イメージであるということができるだろう。（坂井 2009: 240-241）　※下線は筆者による

黙ってひっそりと耐える女性の姿は、同意の有無が不明確であるという点に着眼すれば、暴力的だと受け取る人々も出てくる。しかし、東洋の神秘的なイメージ[17]、日本の伝統イメージが接続されることによって、この女性の受動性は、言葉を交わさなくてもお互いを理解し合っている信頼の証となり、暴力であることを免れるうえ、さらに独特の美へと昇華される。そのために当事者が繰り返し語る内容とされる、「身体を縛ることによって逆に相手の精神を解放」するという言説は、出口氏が着目した「緊縛されると自由を感じる」という言葉を縛り手側から語ったもので、両者は瓜二つであることがわかるだろう。出口氏は「緊縛されると自由を感じる」ことはパラドクスであるとしたが、言説の目的が暴力の不可視化だとすれば矛盾は生じないのである。

---

[16] 緊縛師・明智伝鬼のこと。1990 年代後半から海外において商業活動を行なった。日本の SM=緊縛というイメージを定着させた最大の要因はこの明智の海外活動だったと坂井氏は指摘する。明智が自身の緊縛ショーに、彼が独自に研究していた捕縄術を活かしたことで、海外において、緊縛は「日本を代表する正統性を持つものとして、インパクトを持って海外に受けいれられるようになった」（坂井 2009: 240）。明智は、世界で最も著名な緊縛師の一人であり、国内における影響力も絶大である。K 氏がシンポ当日行なったような、緊縛師が目立たぬ格好で黒子に徹するというスタイルも、もともとは明智のスタイルである。なお、言うまでもないが、明智が捕縄術を研究しショーに活かしたことは、捕縄術が緊縛の起源であることを意味しない。

[17] 世界的な緊縛人気の背景には明らかにオリエンタリズムがあり、『緊縛の文化史』にもそれは濃厚に読み取れる。

２－３　緊縛シンポは緊縛を研究していたか

このように、緊縛に関して用いられる「自由」という言葉は、日本の緊縛師たちがビジネスを展開する上で、日本の緊縛師とモデルの関係に西洋人が見出しがちな権力関係を無効にするものとして機能してきた可能性がある。類似の事態は国内の SM/緊縛コミュニティでも発生していたことは明らかである。防御言説のすべてが、暴力の不可視化を目的としているわけでは当然ないし、緊縛のすべてが暴力であるわけでももとよりない。しかし、このように防御言説が機能している局面が確実にある以上は、「自由」の内実は極めて慎重に検討されなければならない。SM や緊縛にまつわる様々な言説が、これらが置かれた社会状況と関連して構築されたことに無自覚なまま、当事者の語る観念を分析することはできない。

このような暴力の不可視化は、欧米の、フェミニズム理論を中心とする SM 研究において非常に頻繁に論じられてきたものでもあり、かなりの研究蓄積がある。しかし出口氏はこれらを参照した形跡はない。緊縛と SM は異なるが、関連分野であり、常識的には参照するべきだろう。参照していれば、拘束、支配、苦痛それぞれを求める緊縛の区別について思い至ったであろうし、男性緊縛師と女性モデルという構造に対する批判にも、あらかじめ準備することができたはずである。そもそも、緊縛という、男性が女性を縛ることが多い実践について、支配と従属という切り口で論ずるのであれば、広くフェミニズム・ジェンダー論に学ぶことは必要不可欠と言える。

出口氏は「緊縛の哲学」において、「緊縛されると自由を感じる」ことを過度に一般化しないように配慮はしていた。しかし、配慮したとして、では、一体誰の、どのような「自由」について話していたのかは、全く示されなかった。むしろ当日は、緊縛パフォーマンスを行なった K 氏と A 氏の関係を示唆しながら発表が行われたため、より議論は錯綜したといえる。出口氏は、縛る者と縛られる者との関係を支配・従属関係だとした上で「自由」を論じたが、K 氏と A 氏は、両者ともに SM プレイに興味がないこと、したがってパフォーマンスにおけるふたりの関係は、支配/従属的な関係ではないことを何度も強調していたからである（note⑤）[18]。シンポ当日では、このような当事者からの異論はほとんど考慮されるこ

[18] 出口氏は、本ワークショップ討論において、シンポは「SM に回収されない新たな緊縛のあり方を実践的に悩みながら模索している当事者」と真摯に向き合った結果である、ワークショップ登壇者もまた、このような一部の当事者の声をきいていないのではないかという趣旨の発言をしたが、この当事者が討論において述べていたのは、緊縛に偏見を持つ家族との関係に関する悩みである。筆者が述べているのは、まさにこのような、当事者個人の背景を踏まえた上でその声を理解しなければならないということである。個人的な悩みに立脚した主張を、即座に緊縛一般論に還元して「緊縛ニューウェーブ」にしてしまうことを批判しているのである。さらに、「SM に回収されない新たな緊縛のあり方」を提示するにあたって、その緊縛を SM 的緊縛と比較し、後者を劣位に置きスティグマを付与する行為が、上記のような反論で正当化できるとは考えない。

とはいえ、筆者は出口氏が本当にこの当事者に真摯に向き合ったと信じているわけではない。なぜなら、「SM に回収されない新たな緊縛のあり方」といえば、シンポに招聘された緊縛師 K 氏が積極的に行なっていることであるが、当日、出口氏は K 氏に SM 的な緊縛の話題を振るばかりで、新たな緊縛のあり方については何ら深めることをしなかったからである。そして、「緊縛の哲学」は完全に、SM に回収される類の緊縛をテーマとしていた。なぜ出口氏は SM 的緊縛を論じないやり方で「SM に回収されない新たな緊縛」のみ

となく終了したが、このことは、主催者が先行文献を無視するのみならず、当事者からも真摯に学ぼうとしていないという事実をはっきりと示していた。

以上、出口氏の「緊縛の哲学」は、当事者が語る防御言説の構築性に気づかないまま、言葉の共通性のみを以て強引に哲学の理論に接続し、全く緊縛と無関係の、空疎な自由について論ずるものである。学術的意義は全くなく、百害あって真に一利もない報告であることは論を待たない。このような想像を絶する事態を招いているのは、出口氏の緊縛への無関心である。出口氏は、おそらく既存の哲学理論の中から、緊縛に使えそうな理論を見つけ（フロム）、それについて勉強するという作業は行なったのだろう。しかし、それだけである。シンポで発生した多くの当事者加害は、出口氏が緊縛そのものに対する知見を全く得ようとしていないことに起因する。出口氏が、欧米の SM 研究を参照していれば、女性蔑視という批判は想定できたはずであるし、坂井氏の論文を読んでいれば、「自由」という言葉の構築性に気づくことができたはずである。そして当事者の話に耳を傾けていれば、当日の緊縛パフォーマンスに支配と従属関係を読み込むことが誤りであることがわかったはずである。このような空疎な自由論が展開されることもなかっただろう。

これらの先行研究は、それほどアクセスが難しいものではない。BDSM や Sadomasochism、 Masochism などで検索すれば、英語圏の SM 研究論文がいくらでも見つかり、その論点をざっくりと把握することは短時間で十分可能である。坂井論文は論文集に収録されているため、CiNii 等の論文データベースでは表示されないが、シンポで「緊縛」の語が初めて使用された（これは事実ではない。詳細は note②を参照）と紹介された「奇譚クラブ」で検索すれば、手前味噌ではあるが筆者の論文（拙稿 2016）が表示され、本稿で筆者は「はじめに」部分で坂井論文を引用している。さらに、出口氏は当日、F 氏・Y 氏報告「ミニ講義」の内容について、「雑誌みたいなのがあって」(『奇譚クラブ』のことか)、「あるようでございます」などというあいまいな口調で言及しており、この点から推測するに、出口氏本人は『緊縛の文化史』にすら直接目を通していないのである。出口氏の緊縛研究はいまだ始まってすらいないというべきである。

このような、研究対象に関して何ら知識を得ようとしないという態度は理解しがたいが、自身の哲学理論の応用先を探していただけだというならば、このようなことも起こるのかもしれない。加えて、出口氏は当日の趣旨説明において、「緊縛に関する批評というのは分厚い歴史がある」が、自分たちの人文学的アプローチはこれらとは異なり、「緊縛批評をするわけではございません」と発言した。この「緊縛批評」が何を指しているのか全く不明ではあるが、出口氏は続けて、「緊縛の、ないしは緊縛ニューウェーブの批評ということではなくて、そういったものにインスパイアされた」、「人文系の考えをお話したい」と述べた。緊縛シンポにおける人文学者の報告内容は、緊縛や緊縛ニューウェーブそのものの研究ではなく、そこからインスパイアされた考えだというのである。この発言の意味について、筆者は長らく理解できず、ずっと考えていたため今日まで言及を控えていた。現在でも理解で

に焦点を当てた哲学議論を展開しなかったのだろうか。矛盾である。

きているのか確信はない。この発言は筆者にとって、緊縛をネタに連想ゲームをすると言っているに等しく、それは極めて非倫理的なことであり、堂々と趣旨説明で宣言されるべきことではないと感じられたからである[19]。

しかしながらここまで見てきたように、出口氏らの、緊縛そのものに関する知見を収集しない態度は、このような連想ゲームが応用哲学の研究手法として認められている、あるいはかねてから繰り返されてきたことを示すのかもしれない。そうではないと信じているが、ともかく、このように堂々と緊縛自体を研究しないと宣言してはばからない態度が、当事者加害を引き起こしたことは明白であると言える。応用哲学とは、「『この現実についてのもの』でなければ、それは一種の虚構、パラレルワールドに関する単なる『物語』で終わってしまう」（戸田山・美濃田・出口　2012:24-25）と、ほかならぬ出口氏本人から宣言されて日本において始まった学問なのではないか。緊縛シンポおよび出口氏の「緊縛の哲学」はまさに、パラレルワールドに関する単なる物語、しかも他者に害を与える物語であり、緊縛シンポはまさにそう宣言されて開会したシンポジウムだったのである。

なお、『これが応用哲学だ！』所収の戸田山和久「哲学を応用するとはいかなることか」では、「哲学内部にすでにできあがっている何らかの学説を売りつけようとすること」を「定食モデル」と名付けて退けている。いわく、哲学説というのはかなり特殊な視点や前提に基づいてむりやり立てられた問いに対する解答として提案されているものであるから、「たいてい売り物にならない」。「哲学説の在庫の中から現実社会からの注文にぴったりのものが眠っていると考えるほうがおかしい」という（戸田山・美濃田・出口 2012: 29）。この定食モデルは、出口氏が行なった、「アジア的自己/われわれとしての自己」を緊縛に売りつける態度を正しく予言している。

結びにかえて

緊縛シンポは、今に至るまで話題を集め、SNS 上でも多くの意見を目にすることができた。そのなかには、学際的な分野なので、先行研究すべてに目配りをすることは難しく、このようなエラーが起こることを責められない、といった意見があった。

ここまで論じてきたように、緊縛シンポは、緊縛が学際的研究対象であるから先行研究に十分に目配りができず、結果エラーが発生したのではない。多くの問題点は、学際性以前の極めて初歩的な研究プロセスで発生している。研究者であれば常識的に踏まえておくべきことのほとんどを踏まえず、結果、およそ考え得る限りの当事者加害を引き起こしている（note⑥）。そして、初歩的ミスを大量に発生させた最大の問題は、哲学理論を学んでさえいれば、研究対象に関する知見を収集しなくともよいとする哲学者の研究姿勢である。このような姿勢は、歴史学者としては理解しがたいし、哲学以外のほとんどの学問分野で同様に

[19] 筆者が出口氏の発言の意味を取り違えているのならそれでよく、その場合はお詫びしたいと思う。

理解しがたいものなのではないだろうか。哲学理論を学べば事足り、よく知りもしない対象について「インスパイア」された考えを語ることが学問だとするその態度は、怠慢であり傲慢であろう。研究対象が遠い過去の出来事やモノであるうちはまだそれでもよい。しかし、生きている人間を対象とした場合はどうなるのか。研究対象とされた人々は、かかる哲学者の「応用研究」に付き合い、加害を耐えなければならないとでもいうのだろうか。もしくは、緊縛シンポは論外としても、仮にきちんと手続きを踏まれた意義のある「応用哲学」あるいは「学際的研究」であれば、加害は仕方ないというのだろうか。冗談ではない。応用性や学際性が加害や搾取を免責することがあってはならない。

また、本ワークショップの質疑応答において、本気で今後も緊縛を研究する気があるのかと尋ねられた出口氏は、ある、という趣旨の返答をした。この点を評価する研究者のツイートを Twitter 上でいくつか見かけた。「緊縛自体は面白い」のだからと、出口氏による今後の研究の継続を期待する声が複数あった。ワークショップ開催以前にも、新規的分野にトライする行為自体は称賛し、今回の「エラー」にめげずに研究を継続してほしいという意見は多くみられた。

緊縛は、サディズムとマゾヒズムを主として研究してきた筆者にとって、現状ではそれほど「面白い」とは感じられないが、もちろん誰かにとっては「面白い」点があるのだろう。緊縛は確かに「面白い」と言い得る。しかし、面白さをなぜ、わざわざ指摘する必要があるのだろうか。また、例えば、「部落自体は面白い」、「ALS 自体は面白い」といって、部落研究や難病研究において決定的な加害行為や搾取を引きおこした研究者の研究継続を今後も期待するという態度は、あまり見かけないように思う。おそらくこのような対象を「面白い」と形容することにはためらいが発生するし、加害への償い、そして被害者感情の問題が当然想起されるのだ。緊縛であれば、かかる言い回しが比較的簡単に口にされるということに、また、研究水準を満たさないシンポジウムが開催されてもやむなしとするかのような認識に、筆者は釈然としない思いを抱いている。

また、出口氏が緊縛シンポを企画した背景として、昨今の大学運営において、分野横断型の華々しいシンポジウムを開催したり、海外への発信に力を入れて国際的な研究だとアピールしたりすることを要求されることがある、という事情を指摘する意見が複数あった。確かにそのような要求があるのは事実であろう。こういったシンポジウムが評価され、研究費が支給されることもあるだろう。このような事態を引き起こした背景としてはうなずける。

しかし、だからなんなのだと言いたい。このような見せかけだけの研究成果を披露することに抵抗するのが、いみじくも出口氏が「炎上」騒動のさなか口にした「学問の自由」の本来の姿ではないのか。たとえそのような方向への圧力があったとしても、圧力に屈しないことは研究者として必要なことではないのか。パーマネント職を持つ教授にそれができないとは思わないし、筆者は実際にそうしている研究者を知っている。どうしてもシンポジウムを開催しなければならないのだとすれば、本来の自分の研究で勝負すればよかろう。自身の研究の意義を信じるならば、そちらのほうがはるかに有益である。なんら学術的価値のない、

当事者加害のフルコースのようなシンポジウムを、困窮する若手研究者の傍らで多額の研究資金を用いて開催し、あまつさえその後の訂正対応も行わずに放置することは、決してやってはいけないことである。恥を知れと言いたい。

《参考文献》

河原梓水「病から遊戯へ――吾妻新の新しいサディズム論」（井上章一・三橋順子編『性欲の研究　東京のエロ地理編』平凡社、2015）

――「吾妻新と沼正三によるズボン・スラックス論争――1950 年代『奇譚クラブ』における日本的サディズムの萌芽」（『年報カルチュラル・スタディーズ』4、2016）

――「現代日本の SM クラブにおける「暴力的」な実践：女王様とマゾヒストの完全奴隷プレイをめぐって」（『臨床哲学ニューズレター』3、2021）

河原梓水・小西真理子「対談　京大・緊縛シンポジウムを考える」『フィルカル』（6-2、2021）

坂井はまな「海外 BDSM 界における<日本>イメージ――快楽の活用とジェンダー」（川村邦光編『セクシュアリティの表象と身体』臨川書店、2009）

田中雅一「縛りからシバリへ――もうひとつのクールジャパン」（佐藤和久・比嘉夏子・梶丸岳編『世界の手触り　フィールド哲学入門』ナカニシヤ出版、2015）

戸田山和久・美濃田正・出口康夫『これが応用哲学だ！』（大隅書店、2012）

中田まさひろ編『日本緊縛師列伝　縄師の肖像』（三和出版 2019）

マスターK 著、山本規雄訳『緊縛の文化史』（すいれん舎、2013）

水越ひろ『写真で覚える捕縄術　手にとるようにわかる完成手順』（愛隆堂、2005）

宮本常一・安渓遊地『調査されるという迷惑　フィールドに出る前に読んでおく本』（みずのわ出版、2008）

【謝辞】本稿は科研費・21K17987 の助成を受けたものです。

【付記】2021 年 12 月 29 日、「緊縛哲学研究会」のサイト（https://kinbakuphil.jp/）が新たに公開され、本サイト内で謝罪文が 2 つ公開された（出口康夫「謝罪：緊縛シンポジウムについて」、Y・F「「緊縛シンポジウム」における「ミニ講義」についての謝罪および内容の訂正」,2022 年 1 月 13 日参照）。緊縛シンポ公式サイトから緊縛哲学研究会へのリンクがないこと、そして、公式サイト内の「 シンポジウムの動画の一部について不愉快と感じられた方には申し訳ございません」という謝罪文言の削除と、「不愉快」という言葉を用いた謝罪をしてしまったことへの謝罪を行なうというワークショップでの約束（詳細は note⑦を参照されたい）が果たされなかったことは誠に遺憾である。しかし、「ミニ講義」における事実誤認と偽史の流布については、おおむね適切な謝罪・訂正対応がなされたと感じている。筆者の指摘を真摯に受け止めていただき、謝罪・訂正文作成の労を取られた Y 氏・F 氏には感謝申し上げる。今後は、 海外の多くの緊縛愛好者が待ち望んでいる 、謝罪文の英語版公開を一刻も早く望む次第である。（1 月 14 日）

（かわはら・あずみ）